

軍事基地化に抗する－与那国島からの報告－



飯島滋明 宮坂清

## 「安保3文書」と軍事基地化する「与那国」

飯島 滋明

(名古屋学院大学。憲法学・平和学)

### 【1】与那国島と私

私は2019年には5月、8月、10月、2021年には5月、10月、11月、2022年には3月、8月、11月、そして2023年1月と、合計10回、与那国島に行っています。2023年4月にも内田雅敏弁護士と与那国島に行く予定です。

論文としては「与那国島への自衛隊配備と日本国憲法」(『名古屋学院大学社会科学編 56 巻3号』)、「南西諸島への自衛隊配備と憲法上の権利・自由」(憲法ネット 103 (編)『安倍改憲・壊憲総批判—憲法研究者は訴える』(八月書館・2019年))などを執筆しています。

北樹出版の『初学者のための憲法学』では、おそらく憲法の教科書としては初めてだと思いますが、与那国島のことを書きました。与那国島は自然豊かで良いところですが、私が与那国島に行ったのは「観光」のためでなく、軍事基地化が進む「与那国」の実態を把握し、その問題点を社会に提起するためです。2022年12月16日、岸田自公政権は「国家安全保障戦略」、「国家防衛戦略」、「防衛力整備計画」の安保3文書を閣議決定しました。本稿はいままでの与那国島での調査に基づき、2022年の安保3文書が与那国にどのような影響を及ぼすかを紹介します。



【2023年1月 久部良から比川にむかう県道216号にて飯島撮影】

### 【2】アメリカの要請による自衛隊配備

まず、与那国島への自衛隊配備は日本防衛のためでなく、アメリカの要請を受け入れたためです。2006年から2009年まで沖縄総領事の地位にあり、「ゆすり発言」で解任されたケビン・メアは『決断できない日本』(文芸春秋、2011年)で以下のように述べています。

「日本最南端の与那国島から台北までは110キロにすぎず、台湾海峡有事の際は戦略拠点

の一つとなる」(126 頁)。

「与那国島には翌 07 年 6 月、米海軍佐世保基地所属の掃海艇 2 隻が寄港し、09 年 4 月には石垣島に同じ 2 隻の掃海艦が初めて寄港・接岸しました。与那国、石垣両島への米艦寄港は有事を想定して、八重山諸島の港湾施設の状況を把握するために事前の調査が必要との判断から実施した」(163 頁)。

アメリカはアメリカの戦争でアメリカ兵の代わりに外国兵士を戦わせてきた歴史があります。朝鮮戦争の際、アイゼンハワー大統領は「アジアでどうしても戦争が避けられないのであれば、アジア人同士で戦わせろ」と発言しました。ベトナム戦争に関して国防総省は、「〔ラオスの〕モン族の兵士の 10%が死んだ。彼らがいなかったら、27 万人の米兵が死ぬことになっただろう」と述べています。実際、ベトナム戦争でアメリカ兵の犠牲を少なくするため、アメリカはフィリピン、韓国等に派兵を要求しました。

最近のアメリカも、アメリカの代わりに日本に負担を求めてきました。たとえば秋田と山口に配備が予定されていたイージス・アショアですが、2017 年 4 月 27 日、米上院軍事委員会ではリス米太平洋軍司令官（当時）は以下の発言をしています。

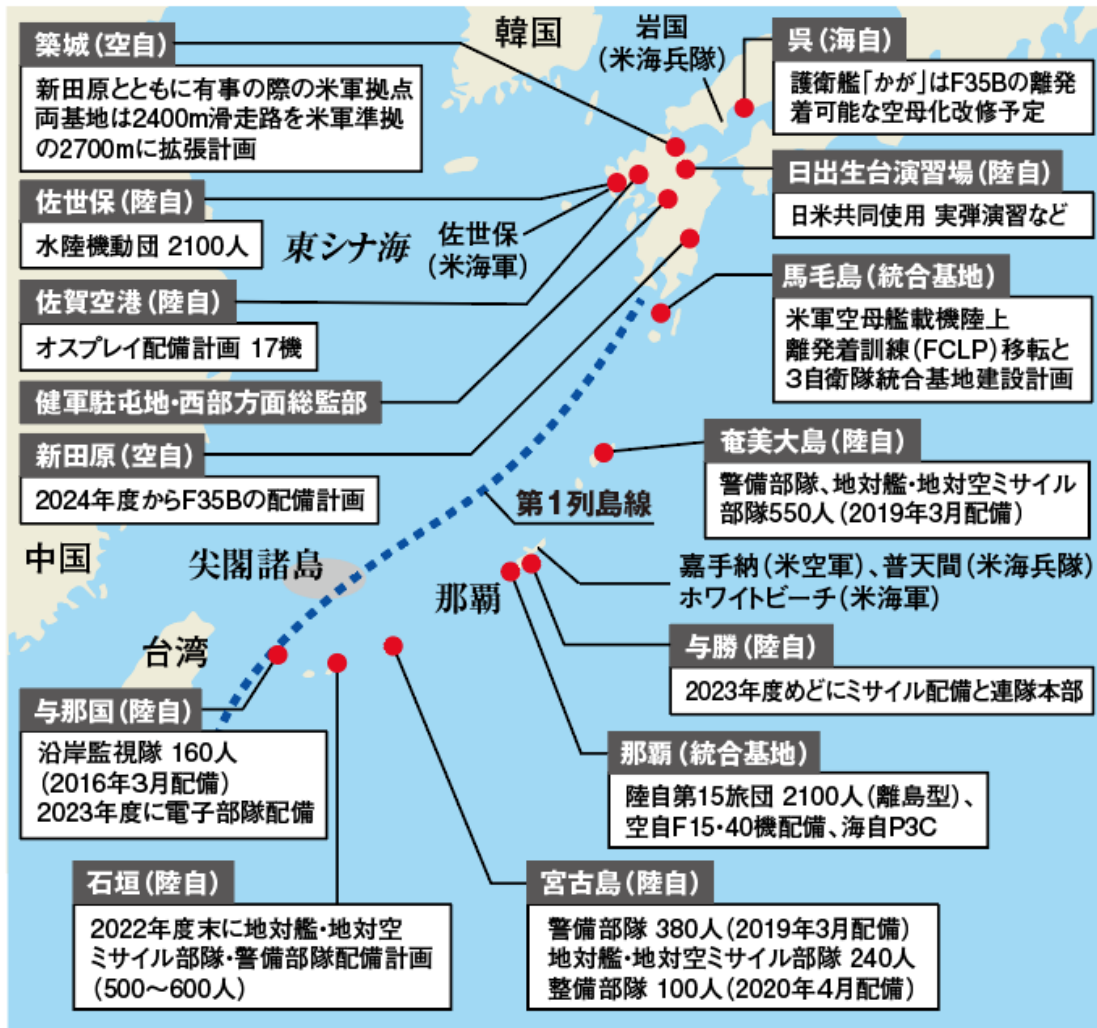
「日本は THAAD（高高度防衛ミサイル）かイージス・アショア、あるいは両方の導入を決断すべき」

「日本がこれらを購入すれば、我々が配備しなくても済む」

アメリカの要求に基づき、安倍自公政権はアメリカの代わりにイージス・アショアの配備費用約 6000 億円を負担しようとしてきました。「敵基地攻撃能力」についても『読売新聞』2023 年 1 月 23 日付は「日本への中距離ミサイル配備、米が見送りへ…『反撃能力』導入で不要と判断」との記事を掲載しています。記事の内容を紹介すると、「米政府が、日本列島からフィリピンにつながる『第 1 列島線』上への配備を計画している地上発射型中距離ミサイルについて、在日米軍への配備を見送る方針を固めたことが分かった。日米関係筋が明らかにした。日本が『反撃能力』の導入で長射程のミサイルを保有すれば、中国の中距離ミサイルに対する抑止力が強化されるため不要と判断した」とされています。もともとアメリカは中距離ミサイルを日本に配備する計画を持っていました。ところが岸田自公政権が 2022 年 12 月 16 日に安保 3 文書で「敵基地攻撃能力の保有」を決定したため、アメリカが中距離ミサイルを配備しなくても良いと判断したというのが記事の内容です。

南西諸島への自衛隊配備、敵基地攻撃能力保有の一環としての長距離ミサイル配備はアメリカの軍事戦略の一環です。そしてベトナム戦争の際のモン族や韓国兵のように、アメリカの戦争でアメリカ兵の代わりに自衛隊が戦い、沖縄が戦場になる可能性が高まります。

## 第1列島線における日米軍事基地配置図



提供: 沖縄平和運動センター

【平和フォーラム HP にある地図。2021 年 9 月作成。飯島監修。2022 年の安保 3 文書では与那国島へのミサイル部隊配備、駐屯地の司令部の地下化等が計画されている】

### 【3】安保 3 文書と与那国

2014 年 2 月、大江健三郎さん、大田昌秀さん、高良鉄美さん、鎌田慧さん、落合恵子さん、雨宮処凜さんたちが「戦争への道を突き進む政府の暴走を阻止し、一人ひとりの平和に生きる権利を守りぬくための運動」として、「戦争をさせない 1000 人委員会」を全国的に立ち上げました。私は事務局次長をしています。その関係もあり、「1000 人委員会」の HP で「壊憲・改憲ウオッチ」を連載していますが、25 号の「安保 3 文書と沖縄」で、安保 3 文書が沖縄に及ぼす影響として以下の指摘をしました。

- ①自衛隊が増強され、
- ②軍事訓練が増加し、
- ③戦争遂行拠点が整備され、
- ④実際に戦場にされることで、攻撃対象になる危険性すら想定。

以下、その内容を紹介します。

#### (1) 基地等の新設・増強の計画。

2016年から与那国島には自衛隊が配備されています。人口約1700人の島ですが、「情報保全隊」という、市民監視を任務とする自衛隊員もいます。今後、与那国島では以下のように自衛隊が強化される計画などがあります。

- ・電子戦部隊配備（2023年度）
- ・ミサイル部隊配備
- ・司令部の地下化
- ・シェルター建設
- ・空港の拡張等
- ・港湾の拡張等

与那国駐屯地も司令部の地下化が検討されています。ということは、与那国島じたいが攻撃対象となることを岸田自公政権が想定していることとなります。

#### (2) 軍事訓練の増加

2022年11月10日～19日にかけて、「キーン・ソード23」が実施されました。2022年11月17日、鳥取県美保基地のC-2輸送機から16式機動戦闘車（Mobile Combat Vehicle、MCV）が降車しました。MCVは「タイヤで走る戦車」とも言われ、74式戦車に匹敵する砲力を持ちます。時速100kmで走行できます。公道をMCVに走行させる目的ですが、一つが、市民に慣れさせる「地ならし」です。そしてもう一つが「実際の戦闘を想定しての訓練」になります。『琉球新報』2022年11月18日付社説〔電子版〕では、「防衛省幹部は「有事になった時に通ったことがない道を通る『ぶっつけ本番』では戦いにならない」と述べている」と紹介されています。与那国島でMCVが攻撃することを想定した訓練、与那国島を戦場にする想定をした訓練が行われました。そして「キーン・ソード23」では「連絡調整所」が設置されました。端的に言えば、日米の作戦会議の訓練がされました。

「キーン・ソード23」が実施されていた11月16日、私は与那国島に行きました。与那国島の市民はおそらくそんなことはしませんが、私は久部良の宿泊先から比川の共同売店まで、夜でも歩いて移動することがあります。だいたい1時間で着きます。星がととてもきれ

いなこと、犯罪の心配がないので、星を見ながら比川の共同売店まで買い物に行きます。おにぎりなどもとてもおいしいです。共同売店の近くにある「楓食堂」も私の行きつけのお店で、あざみ麵のそばも絶品です。しかしこの時には夜、比川まで歩いて移動しませんでした。アメリカ兵による犯罪、そしてアメリカ兵の犯罪があってもアメリカ兵に有利になる「日米地位協定」の存在を考えると夜、歩いて比川まで移動する気になれませんでした。普段は犯罪の心配をする必要もない与那国島ですが、アメリカ兵がいることで「犯罪」の心配もしなければならぬ状況にもなります。

こうした日米の軍事訓練ですが、「国家防衛戦略」14 ページでは、「日米一体となった抑止力・対処力の強化の一環として、日頃から、双方の施設等の共同使用の増加、訓練等を通じた日米の部隊の双方の施設等への展開等を進める」とされています。安保 3 文書で明記されたように、与那国島での日米共同訓練も増加する可能性があります。



【美保基地 C-2 から降車する、北熊本駐屯地の MCV。2022 年 11 月 17 日飯島撮影】

### (3) 戦争遂行拠点の整備

「防衛力整備計画」9 ページでは以下のように記されています。

「自衛隊の機動展開や国民保護の実効性を高めるために、平素から各種アセット等の運用を適切に行えるよう、政府全体として、特に南西地域における空港・港湾等を整備・強化する施策に取り組むとともに、既存の空港・港湾等を運用基盤として使用するために必要な措置を講じる」。

「政府全体として、特に南西地域における空港・港湾等を整備・強化する施策に取り組む」

とされているように、与那国で計画されている、空港や港湾の新設・拡張の動きは軍事拠点を整備するという目的があります。

#### (4) 実際に戦場にされることで、攻撃対象になる危険性すら想定

「防衛力整備計画」28 ページでは以下のように明記されています。

「南西地域における衛生機能の強化に当たっては、自衛隊那覇病院の機能及び抗たん性〔攻撃を受けても機能を失わずに軍事的活動を実施する能力。飯島による補足説明〕を拡充することが有効と考えられることから、同病院の病床の増加、診療科の増設、地下等の機能強化を図る。その他の後送先となる自衛隊病院についても、建て替え等の機会を捉え、同様の機能強化を図る」。

「防衛力整備計画」28 ページでは以下の内容が明記されています。

- ・ 緊急外科手術に関する教育課程の新設、要員の増加
- ・ 自衛隊那覇病院の病床増加、地下等の機能強化
- ・ 自衛隊員の身体歴のデータ化
- ・ 血液製剤の確保・備蓄のための体制づくり

こうした内容からも明確なように、実際の戦闘で自衛隊員が負傷する可能性、那覇が攻撃を受ける可能性などが想定されていることが分かります。

#### 【4】先行する反基地運動規制 「土地等監視及び利用規制法」

このような自衛隊配備には基地反対運動がされる可能性もあります。そうした反基地運動は「幸福追求権」（憲法 13 条）や「表現の自由」（憲法 21 条）などを根拠に認められます。しかし 2021 年 6 月に菅自公政権が成立させた、「基地等監視及び利用規制法」を根拠に、こうした反基地活動が法的に封じられる可能性があります。写真のように、与那国島駐屯地には「許可無く写真を撮影すること」を禁止するとの掲示がなされています。

2019 年当時、このような写真撮影を禁止できる法令はありません。しかし与那国島ではすでに下記の掲示がされています。





## 【5】おわりに

私は安保法制違憲訴訟で宮崎、釧路、山口、福岡、愛知で証人として証言しました。平和的生存権については「戦争や軍隊により生命や身体、健康を奪われたり脅かされない権利」と証言しました。与那国島にミサイル部隊が配備されれば、いざという時には当然、攻撃対象となります。安保 3 文書に基づく与那国島へのミサイル部隊の配備などは、与那国島の市民の生命や身体等をますます危険にさらすため、「戦争や軍隊により生命や身体、健康を奪われたり脅かされない権利」である「平和的生存権」（憲法前文等）侵害の危険性が高まります。

さらに与那国島での自衛隊配備・強化について防衛省は「説明責任」を果たしていません。「国家防衛戦略」13 ページでは「地元に対する説明責任を果たしながら、地元の要望や情勢に応じた調整を実施する」とされています。しかし 2023 年 3 月段階でも、与那国の市民が求めているミサイル配備について防衛省の説明会は開催されていません。

最後になりますが、安保 3 文書やそれに基づく軍事力強化が本当に与那国の人々の平和と安全を守るものになるのか、冷静に認識する必要があります。

久部良中学校の壁にあるように、与那国島から台湾は極めて近い距離にあります。



【久部良中学校。2022 年 8 月飯島撮影】

2022年8月、中国のミサイル発射後に与那国島に行きましたが、何人かの島民が「戦争になったら助からない」、「平和的外交」と言っていたのを私は聞いています。台湾をめぐる中国とアメリカで武力衝突がおこれば与那国島が決して無事では済まないことを住民は実感しています。与那国島の市民を守るためには戦争は絶対に回避する必要があります。「戦争は外交の失敗と定義されている。攻めてきたらどうするんだという人がいるが攻められないようにするのが日々の外交の力。それを怠っておいて軍備増強するのは本末転倒ですね」と、音楽家である坂本龍一さんは発言しています。2022年12月14日の沖縄県議会で、玉城デニー知事は「戦争をしないことが住民を守る一番の政治的手段」と発言しています。

信頼醸成を求めての平和的外交こそ、与那国島の市民を守る手段であることを冷静に認識する必要があります。前田哲男・飯島滋明編『日本軍事入門』（吉川弘文館、2013年）でEUやASEANについて紹介しているので詳しくはそちらをご覧くださいですが、ドイツとフランスは普仏戦争（1870-71年）、第一次世界大戦（1914-18年）、第二次世界大戦（1939-45年）と、わずかな期間に何度も戦争を繰り返しました。戦争を繰り返さないため、フランスとドイツの政治家たちは時に対立しつつも、信頼醸成に向けた外交を真摯に展開してきました。その成果がEUとなって結実しました。今、ドイツとフランスが戦争するなど考える人はいません。こうしてドイツやフランスが戦争になる事態を回避する関係がつけられました。自公政権も安保3文書のように中国などを仮想敵として想定して「戦争できる国づくり」をすすめるのではなく、信頼醸成に向けたとりくみを真剣に、かつ根気強く行うべきです。人的交流・経済的結びつきを強化するという点では、2005年3月に策定された、「与那国・自立へのビジョン 自立・自治・共生 ～アジアと結ぶ国境の島 YONAGUNI」の構想の実現は極めて重要です。与那国町のHPで入手可能ですので詳しくはそちらをご覧くださいですが、与那国が台湾や中国、沖縄や日本との人的・経済的交流の中継点となることで、EUやASEANのように戦争できない関係を生み出すことができると同時に、与那国の経済の活性化にもつながる可能性があります。安保3文書のように、中国などを敵視してミサイル部隊などを与那国に配備するのではなく、EUやASEANを手本として、そして「与那国・自立へのビジョン」のように近隣諸国との信頼醸成を求めての外交手段を追及することこそ、与那国の市民の平和と安全、そして地域経済の活性化につながります。

【2023年3月17日脱稿】

## 軍事基地化する島の共同売店

宮坂清（名古屋学院大学国際文化学部）

はじめに

私が与那国島を初めて訪れたのは2022年11月、自衛隊の戦闘車による公道走行が初めて実施される前日、冷たい雨と重苦しい空気が島を覆う暮れ方だった。翌日、空港前で行われた抗議活動に参加したが、声をあげる人たちの少なさと、彼らの姿を追いその声をしきりに拾おうとするたくさんのカメラやマイクのアンバランスが、この島における自衛隊反対運動のおかれた厳しい状況を見せつけていた。



戦闘車公道走行への抗議：宮坂撮影

国家の巨大な力が国境の小さな島を覆い尽くそうとしているようにみえた。前日に初めてやってきたに過ぎない私が、メディアや地元のさまざまな目に晒されつつそれでも声をあげている人びとと同じように声をあげるのは憚られ、急遽つくってもらったプラカードを手に黙って道に立ち続けた。

与那国島が軍事基地の島として大きく姿を変えようとしていることは明らかだったが、しかしそれに打ちひしがれそうになりながらも前を向いて生きようとしている島の人たち、とりわけ私をこの抗議活動まで導いてくださったご夫妻の姿に触発された。抗議活動の前後、おふたりをはじめとした島の人たちからお話を聞き、その生活の一端に寄り添い目を凝らしてみると、上から覆いかぶさってくるかのような国家の力とは異質な、島に生きる人びとから発せられる微細な力が、そこかしこに躍動しているのがみえた。私はこの島で調査を行うことを決め、それ以降3回にわたり、短期間であるが調査を重ねた。

そもそも以前から与那国島が気になっていた。この小さな島が日本のなかで最も西に位置する沖縄県にあり、しかもその最西端に位置しているからである。私が専門とする文化人類学や民俗学では、沖縄は特別の意味を与えられ注目されてきた。日本をひとまとまりととらえる枠組みにおいて「辺境」の沖縄はむしろ「原郷」とみなされることがあり、多くの研究者が日本のルーツを求めて沖縄を研究してきたのである。これらの分野における沖縄研究は日本の他地域に関する研究と比較しても熱量が大きい。さらに、その沖縄県のなかでも宮古島や八重山諸島は、歴史的にも文化的にも異質でありながら、日本各地の古い民俗との共通性を感じさせるものが多く、多くの研究者を惹きつけてきた。私もまたご多分に漏れず、それらの研究に触れてはある種の憧れを抱いていたのである。中心から遠く離れるほど実は根源に近いとみなすその想像力にとり、与那国島は憧憬の的なのである。

そのような甘い憧憬に釘をさすのが、先の大戦における沖縄戦の惨禍の記憶である。「内地に暮らす私」の沖縄に対する憧憬は容易に蔑視へと転化しうるのであり、実際に歴史はそのように展開してきた。憧憬も蔑視も、沖縄を自分から距離のある他者とみなすまなざしによって支えられており、その表れ出方の違いに過ぎないからだ。八重山の人びとにとってはかつての琉球王府による過酷な支配の記憶がそこに加わるため、事情はさらに複雑である。八重山の人びとは日本や沖縄（琉球）から注がれるまなざしに身勝手さを読み取り、自分たちの文化や政治を切り離し、独自の世界を維持しようとしてきた。

こうみえてくると、日本という国の成り立ちをめぐる矛盾は最西端の与那国島だからこそ先鋭化するのかもしれない。この10年あまりの間に急ピッチで進んでいる軍事基地化の動きもその一端としてみるができる。2016年に陸上自衛隊駐屯地が開設され、2022年には米軍との共同訓練、戦闘車の公道走行が実施され、またミサイル部隊の配備が決まった。一連の動きを加速させている与那国町の糸数現町長は、日本国のナショナリズムと半ば一体化してしまっているようにみえる。沖縄県（琉球）への不信と対抗意識が、この国境の島をして日本国のナショナリズムに接近させている面もあるかもしれない。しかし日本国のナショナリズムは辺境地域に対し自己中心的な態度を示すことがある。与那国島の軍事基地化により守られるのは日本であって、与那国島ではないかもしれない。すべてを委ねてしまうのが正解であるとは思えない。

自己中心的な日本に身を委ねるのではなく、与那国島が与那国島としてこれからもあり続けるにはどうすればよいか。それを考えるのに格好の手がかりを与えてくれるのが、比川地域共同売店である。そこは単にモノを売る店ではなく、島に生きる人びとの力が集まり交差する場として機能している。人びとの必要に応える多種多様な品、工夫を凝らした島の産品を介して交流がなされる場、店員や客がさりげなくことばを交わし、人びとの暮らしがかかわりあい循環する場である。その場に集まる力は、島に継承されてきた文化の遠い記憶にも連なる。上からの強い力を異化し、島を守る真の力をそこにみることができる。本稿はそのような見立てのもとで始めた調査の、最初の報告である。

## 八重山の孤島、与那国島

与那国島は日本の西端に位置する離島である。この地理的な環境は本稿のテーマを考えるうえで重要であるので、やや立ち入って紹介したい。この島は沖縄本島の南西にある八重山諸島のうち最も西に位置し、最も近い西表島まで64km、八重



与那国島を中心に置いた地図：googlemapをもとに作成

山諸島の中心地である石垣島まで 127km ある。沖縄本島までは 509km もあるが、これは東京と大阪の距離におよそ等しい。島の周囲は 27.49 km、東西 12 km南北 4 kmほど、面積は 28.88km<sup>2</sup>で、自転車でも一日あれば観光できるほどの小さな島であるが、宇良部岳(231.3m)をはじめ起伏が大きく切り立った地形が目立つ。他の世界から孤絶した離島というイメージだが、他方で国境の西向こうをみれば、台湾まで 111km、天気がよければその峻巖な山並みが目視できるほどに近い。地図を眺めれば、与那国島は「日本」よりずっと台湾に近いことがわかる。

文化という点からみても、与那国島は沖縄本島その他日本の各地域との違いが大きい。何よりもまず言語が異なり、かつては同じ八重山諸島の石垣島の人びとと話をするのも困難であったほどである。島で今なお広く歌い継がれている民謡も、ことばが異なるがゆえに独特の趣をもつ。八重山の他の島々や台湾とゆるやかに結ばれつつ独自の道を歩んできた与那国島の来歴を想像することができる。

歴史を見渡して注目されるのは、1500 年代頃から近代初期にいたるまで、与那国島その他の八重山諸島が半ば「異文化」である琉球王府により支配され、過酷な人頭税の徴収を受けたこと、そして今なおその記憶が民謡や伝承をとおして継承されているということである。石垣島のオヤケアカハチ、与那国島のサンアイソバはそれぞれの島の英雄として今も人気を博しているが、彼らはいずれも島を琉球王府の支配から救うために立ち上がった人物である。遠く離れた王朝による過酷な支配に苦しんできた歴史ゆえか、太平洋戦争直後の混乱期、アメリカによる統治が及ばないのをみて、石垣島では独立を画策する動きもあったという。

私は 2022 年 9 月から半年ほど石垣島に滞在しているが、八重山の地方紙に県政を批判するできごとがしばしば掲載されるなど、現在でも沖縄県と八重山のあいだには距離があるのだと感ずることがたびたびあった。自衛隊や米軍に対する姿勢をみても、沖縄本島の人びとが強く反発する傾向にあるのに比べ八重山の人びとはそこまでではないと感ずる。それは沖縄戦の被害が沖縄本島より相対的に小さく、戦後米軍基地がおかれることもなかったことが関係しているのかもしれない。

与那国島は八重山諸島のなかでも他地域からの孤絶度合いが高く、近代に至るまで主に他の八重山諸島や琉球と関係を結びつつ、独自の文化を育んできた。ごく近くにある台湾との関係が比較的少なくみえるのは、両島のあいだを流れる黒潮の速い流れが船による交流を阻んだためだろう。近代以降、動力船が一般化すると台湾との関係は一気に深まっていき、日本が台湾を植民地化して以降、20 世紀前半に与那国島は台湾との交易により隆盛した。しかし戦後に国境が引かれその管理が厳しくなると両島との関係は途絶え、日本の西端に位置する離島に過ぎなくなった与那国島は次第に活気を失っていった。

厳しい生活条件

荒れがちな海に囲まれた与那国島での生活は、長らく島内における自給自足を柱に近隣の八重山諸島や台湾との関係のうえに成り立ってきた。その歴史のなかでもとりわけ活況を呈したといえるのが、明治期から大正期にかけて、そして戦後の数年間における、人口の顕著な増加期である。前者は主に自然増であるが、後者は香港・台湾との関係を深め密貿易で栄えたことによる社会増である。戦後の最盛期の人口は公式な記録に残るだけでも 6,300 人を超え、一時在島者を合わせると 15,000 人を超えていたともいわれる。しかしその後、台湾との国境の管理が厳格化すると一転して人口が減少しはじめ、現在に至るまでその傾向が継続している。すなわちまず石垣島や沖縄本島への流出に伴う急激な社会減が起き、その後ゆるやかな自然減が継続している（小野雅司ほか 1979:99-103）。

往時の活況を知っている人からみると現在の島は寂しく映ずるに違いない。2023 年時点で島に暮らすのは 1,700 人あまり、祖納、久部良、比川の 3 集落に寄り添うように生活している。人口規模が小さいゆえに、生活を支えるインフラも心もとない。



与那国島の 3 集落と売店：

島外との交通については、

国土地理院の地図・空中写真閲覧サービスをもとに作成

2023 年 3 月現在、飛行機が石垣、那覇とのあいだを 1 日 4 便が往復している。定期船は石垣とのあいだを「フェリーよなくに」が週に 2 往復し、また那覇とのあいだを「協栄丸」が週に 1 往復している。台風や冬の季節風が強まる時期には何日も船が止まり、島の店頭から野菜その他の食品が姿を消すことも珍しくない。医療・福祉施設をみると、診療所 1 軒、歯科医院 1 軒、老人ホーム 1 軒である。与那国島でロケが行われた、離島にただひとりの医師が赴任し奮闘するテレビドラマ『ドクターコトー』の設定は、この島の現実である。教育施設は、小学校 3 校、中学校 2 校で、高校がないため子どもの多くは高校進学を機に石垣島や沖縄本島に出ていく。またスーパーや量販店はなく、個人経営の各種商店や飲食店が点在している。

### 町政による活性化策

国境の離島という元来の地理的な孤絶度合いの高さに、人口の減少とそれに伴うインフラの縮小が加われば、生活がより困難になり人びとの不安が増すことは容易に想像できる。島に活気を取り戻したいという人びとの願いは切実である。その方策として台湾との交流・交易の促進が注目されるのは、地理的な近さとそれを利用した往時の活況を想起すれば当然であろう。1982 年に対岸の花蓮市と姉妹都市となり定期的な交流活動が行われ始め、以後、

台湾との交流・交易促進が進んだ。2004年、与那国町は近隣の石垣市などとの「平成の大合併」を住民投票により否決すると、翌2005年に「与那国自立化ビジョン」を策定し、台湾との人やモノの交流をさらに促し地域外交をすすめる道を歩み始めた。しかし小型貨物船などの出入国を自由化する「国境交流特区」の申請を国に行ったものの認められずに終わるなど、交流の願いは「国境」に阻まれ思うように実現にこぎつけることができなかった。島の人口を増やし活性化をはかる新たな方策として2000年代後半に打ち出されたのが、自衛隊の誘致であった。当初は反対の声も大きかったが、2012年に尖閣諸島問題が起きると推進派が勢いづき、2015年に実施された住民投票で誘致が決まると、翌2016年には陸上自衛隊与那国駐屯地が開設された。自衛隊誘致の賛否をめぐる一連の過程を経て地域の分断と相互不信が強まっており、反対運動は諦めムードとともに縮小していった。この間、町長として2005～2020年まで4期にわたり自衛隊誘致を進めた外間守吉は、自衛隊誘致を町の「人口増加策」であると捉えていたが、2021年に町長となった糸数健一はそれを「国防策」と位置づけている。つまりそれまで、町はまがりなりにもこの先の道をどう切り拓いていくかを主体的に考えていたが、国家の防衛を優先させその見返りに利益を得るといって他者依存の方針に大きく転換した。町を活性化させるための方策として始まった自衛隊誘致は、やや大げさにいえば、町（島）の未来を国に譲り渡すことに帰結したのである。原子力発電所や廃棄物処理場など、日本各地の過疎地域で活性化のために採用されてきた方策と同様の構図がここにもみられる。それらと異なるのは、置かれたのが他国軍に対抗するための軍事基地であるという点である。以後、2022年11月には陸上自衛隊の戦闘車による公道走行、米軍との合同訓練が実施され、12月には地对空ミサイルの配備が発表されるなど、急速な軍事基地化が進行している。

### 「伝統」の再構成への注目

島の人口が減り衰退する状況への対策として町政が打ち出したのは、国境を開き台湾をはじめとした東アジアとの交流により活性化と自立を促す策と、もうひとつは自衛隊を誘致することにより人口を増やし活性化させる策であり、町は後者の道をゆくことを選び、やがて町の未来を国防に委ねる傾向を強めた。2023年現在、コロナ禍により国際交流が依然として制限されるなか、自衛隊基地や与那国空港の拡大、新港の開設など、国家の防衛力は島の「活性化」を遥かに超えて、島を覆い尽くそうとしているように見える。すでに島のいたるところに自衛隊の影がある。国境を開き他国との交流を促す試みも続いているが、他国に砲門を向けようとしている状況からか、必ずしも順調ではなさそうだ。

滅入ってばかりはいられない。国や町が何かしてくれるのではないかと期待するのではなく、すでに与那国の人びとが行っている実践に注目し、そこから可能性を拓いていくことはできないだろうか。与那国島にはこれまで長きにわたり継承されてきた伝統があり、それを新たな形で生き、伝えていこうとする人たちがいる。そこに立ち返って島を見返すとき、可

能性がみえてくるはずだ。

八重山の人びとの芸能好きは相当なものである。洗練された琉球舞踊とは異なる、地域の人びとの暮らしのなかで培われてきた素朴な舞踊や民謡を、いまも若い人たちが熱心に学び受け継いでいる。与那国も例に漏れず、かつて集落ごとにおかれた「座」(組踊座・花座・旗座・棒座・狂言座などから成る)が、現在は各自治公民館の下で維持・継承を担い、11~12月に行われるマチリ(祭り)のほか、さまざまなイベントで舞踊や民謡が披露され、また小中学校での課外活動にも取り入れられて学芸会などで成果が発表される。

芸能は地域社会で代々継承されているだけでなく、現代的に刷新され対外発信も盛んに行われている。音楽分野では、民謡が洗練された編成のCDとなって販売されたりインターネットで配信されたりしているほか、折からのエスニック音楽ブームに乗り、島のミュージシャンが内地や本島で開催される音楽フェスティバルやイベントに参加し、音楽好きの人たちを楽しませている。また島内で開催される音楽イベントに参加するなど伝統的な祭祀以外にも活動の場を広げ、他の音楽分野との交流も進んでいる。2022年には台湾で、与那国と台湾を結ぶ影絵芝居が企画され、島の民謡音楽家らが横浜など内地で出演しており、対外的な交流へ展開している。

また民具や織物が見直され熱心に制作・発信されていることも注目される。クバの葉でつくられたクバ笠、ホウキ、扇など、生活の道具として継承されてきた民具は、生活や経済が近代化していく過程でつくられなくなっていたが、八重山の一部地域で見直され、与那国でも制作・販売がされている(よなは工房)。また琉球王府が課した人頭税は、織物=貢納布の形でも納められ、戦後に廃れてしまったが、1979年に与那国町伝統工芸館が設立され、与那国花織、与那国ドゥタティ、与那国シダディ、与那国カガンヌブーの4種の織りが継承されている(ていぬ花工房、SAKURA)。また、粉引という技法でつくられた白色が美しいやきもの(山口陶工房)や、島をモチーフにしたTシャツなどのファッション(オネマヒナ)といった新たな「民具」の導入も行われている。こうした「伝統」の再構成を促す触媒として重要と考えられるのが、Uターン・Iターンの



比川小学校の学芸会：宮坂撮影



「鯨生」：与那国町と台湾花蓮市のタイアップによる影絵芝居



人たちである。上記の芸能や民具づくりなどは、与那国島で培われた伝統を活かしつつ、与那国の外からもたらされた技法やアイデアを介して伝統を生き生きと再構成している。観光客のまなざしや雑誌などメディアによる報道も、外からの刺激として伝統の再構成につながっているだろう。またインターネットやスマートフォンの使用が広がったことで、たとえば他地方で実践されているアイデアをインターネットから学び取り入れることも、また島の伝統を発信し商品を流通させることも、容易になっている。与那国島には古くからの伝統と新しいアイデアが交差しつつ生きている。そうして生み出されたものは単なる観光資源ではなく、島に生きる人びとがそこに与那国島とは何かという問いへの答えを見出し、それに拠って立つことができるような何ものかである。



サイト「与那国島の手しごと」より

## 比川地域共同売店

与那国島で継承され再構成されてきた伝統文化と、人びとの生活が交わる場として機能しているのが比川地域共同売店である。「共同売店」はこれまで沖縄の地域社会のありようを象徴する存在として社会学などで注目され、研究が蓄積されてきた。沖縄本島最北部の国頭村奥集落で 1906 年につくられたのが最初とされる。それは近代化に際し沖縄・奄美の村落共同体が主体となってつくった「売店」であるが、商品を販売するだけにとどまらず、村の産品を集約して都市まで運搬・販売し、帰りに必要なものを仕入れ、売店で販売する「コミュニティ・ビジネス」であった。貨幣をあまり持ち合わせない当時の村人に掛売りで販売する画期的な方法により各地に広がった。数え方にもよるが、最盛期には沖縄・奄美などに 200 店舗ほどあったとされるが、交通の発達、コンビニや量販店の進出により、昨今は 70 店ほどまで減り、全体として衰退傾向にある。



比川地域共同売店の入口：宮坂撮影

与那国島の比川地域共同売店は 2011 年に開店した「最も新しい共同売店」として知られる。新しいのみならず、共同売店の研究者・宮城能彦によれば、「比川地域共同売店をモデルにすることの可能性は大きいと思われる」（宮城 2022:60）。比川は与那国島の南部に位置する、3 集落のうち最小の集落であり、人口 100 人 50 世帯ほどが暮らす。高齢者が多く人口は減少傾向にあり、小学校はあるが中学校はない。飲食店が数軒、民宿など宿泊施設が 3 軒あ

る。このような小集落でどのように新たなモデルになりうるような共同売店が誕生したのだろうか。

比川地域共同売店設立の経緯は以下のとおりである。比川には食品や雑貨を扱う商店が1軒だけあったが、生活協同組合が与那国島へ新規進出したことにより経営が悪化し、2000年頃までに閉店したという。これに伴い比川の住民は買物のために祖納か久部良まで行くことになったが、久部良にある最寄りの商店までクルマなら8分だが徒歩だと1時間かかるため、クルマに乗らない比川の高齢者は買物難民化してしまった。やむをえず比川の人びとは自身の買物に際に地域の高齢者の分も代わりに買って来るなどしていた。やがて2008年に「比川地域づくり協議会」が開催された際に「売店がほしい」という声があがり、比川の主に女性たちと町職員が連携して設立へ向け活動を始めた。町役場との交渉の結果、町が土地、建物、備品を購入し、比川自治公民館（住民）が運営するという共同売店としては珍しい形態での運営が決まった。出資は比川のみならず他集落や島外の人たちからもなされたが、逆に比川居住でも出資しない世帯もあったという。運営を業者に委託するという案もあったというが、それだと利益が優先され地域のためにならないという声があがり、地域住民によって構成される運営委員が運営を担うことになった。与那国島にはそれまで共同売店がなく、石垣島の星野共同売店を視察し運営の参考にしたという。数年の準備期間を経て、2011年に比川地域共同売店が開店した。

売店を求める声があがった2008年は、ちょうど自衛隊の誘致が町で論議を呼んでいた時期である。一見すると関連などないように見える自衛隊誘致と共同売店開店だが、売店の設立にかかわったAさんによればこのふたつは実は大きく関わっている。彼女らは自衛隊誘致への反対と共同売店の開店を結びつけて考えていたのである。「自衛隊に反対と叫ぶだけにとどまらず、自分たちにできる、自衛隊誘致に対抗する活動として、共同売店を開店させようと考えていた」という。これはどういうことだろうか、後ほど検討してみたい。

共同売店は出資者から選出される5名の運営委員によって運営される。総会資料などから判断すると、経営はこれまでやや不安定な時期がありながらも比較的順調である。2023年現在、日常の店舗業務は2名の店長と数名の店員によって分担されている。運営委員には男性も含まれるが、店に立つのは全員が女性である。先述のAさんや2名の店長らは島外出身の移住者であり、その他地元の主婦や自衛隊員の家族など、その顔ぶれは多様である。一般に共同売店は地域社会が地域の人たちに便宜を図るためのものでありよそ者は排除される傾向にあるが、この共同売店の運営の中心になっているのは、開店当初から現在に至るまで移住者の女性たちであり、この点は際立った特徴であるといえる。

## 人びとの生活が交わる場

比川地域共同売店はどのような店かと問われれば、一見するとコンビニエンスストアに似ているが、しかしよく見ると大きく異なる点も多い店、と答えられるだろう。年中無休で営

業時間は 8:00～20:00、店内は蛍光灯が煌々と光り、鄙びた小集落には似つかわしくないほど明るい。店舗の床面積は一般的なコンビニエンスストアの 2/3 程度で、どの棚にも商品が所狭しとぎっしり並び、壁や床にも種々の品があふれる。入口横の窓際には地域の産品や土産物、1 列目の棚の手前側に野菜やパンなどが目に入る。奥の棚には食品、菓子、雑貨と続き、壁沿いには冷蔵庫、冷凍庫、飲料用冷蔵庫が並ぶ。商品棚をのぞきこむと、手前に置かれた品の奥にさらに別の品がおかれており、商品の種類はコンビニエンスストアの数倍はありそうだ。



棚の奥には別の商品が：宮坂撮影

並べられている商品の主要な仕入れ先は大きく 3 種類に分けられる。すなわち島内の個人・業者、石垣島の卸業者など、そしてインターネット通販である。島内の個人・業者は各々やってきて商品の売れ行きに応じて納入を行う。石垣島の卸業者、青果店、パン屋、食肉店などには、売店から週 2 回 FAX で発注を行い、船が接岸する日には店の軽トラックで久部良港まで引き取りに行く。インターネット通販は大手 A 社、大手 B 社、内地のネット卸業者などのウェブサイトから発注し、それぞれまとめて運送会社が店に運び込む。発注作業は主に 2 人の店長が担当している。

仕入れの特徴としてあげられるのが、「地域交流促進」と「消費者目線」である。店舗入口に入って手前左右の壁際は島内産の品々専用の棚である。売店オリジナルの T シャツやエコバッグ、クバの民具、民謡の CD、与那国島の関連書籍、ポストカード、与那国織をあしらった小物、やきもの、アクセサリ、そして長命草ちんすこうなどの菓子、海塩を用いた調味料、味噌、海産物の缶詰といった食品まで、壁一面にさまざまな品が並ぶ。島内産の品の種類はこの売店が随一であり、この棚は与那国の伝統がどのように現代に受け継がれているかを知ることができる、博物館展示の役割を果たしている。観光客はもちろん、地元の人が品を手にあれこれ吟味したり店員にたずねている姿もみられ、文化を媒介にした地域交流がなされている。



入口横におかれた島産品：

宮坂撮影

店舗中央にある 3 列の商品棚のうち前の 2 列は食品が並べられており、地場の産品と、コンビニエンスストアやスーパーにありそうな量販品が混在しているが、前者を目立つ場所に置くなどしてより積極的に販売しようという配慮が垣間見える。昼間の時間帯には島内の個人や業者が来店し、野菜、豆腐、かまぼこ、惣菜・弁当、パンをはじめとした食品、そして島でデザインされた衣類や

ポストカードなどの品を納入しつつ、店員と雑談し自らも買物をしていく。島内から納入される品については原価率の面で優遇しているという。共同売店が島で生産される品を島で流通させ、また生産者と販売者と消費者をつなぎ交流する場としても機能しており、その機能を大切に考えていることがわかる。



「消費者目線」もまた際立っている。最奥の棚とその向こうの壁際は雑貨類が並び、とりわけ少量多品種が徹底されているが、これは消費する側の立場に立った仕入れの結果でもある。すなわち、地域の常連客の多くは自分が買いたい品を見つ

島野菜にはタグがつけられている：

宮坂撮影

けられないと店員にリクエストし、店員はそれをノートに記載し次の回に発注する。その際その客の分だけでなく、いくつか多めに注文し店頭で並べる。それが繰り返されることで棚に多種多様な品が並ぶことになる。ただし状況に応じて発注する傾向があるため、仕入れの全体像が見えづらいという難点もあるという。また地産地消を理想としているものの、消費者の立場に立つと価格の安い店（大手インターネット通販）への依存が高くなってしまふこと、なかでも大手 A 社はまとめ買いをすると配送料が無料になるためつい利用してしまうのがジレンマであるという。離島のハンディキャップを帳消しにしてくれるのがグローバル企業であるというのは皮肉だと、A さんは苦笑いする。

## 多様なモノ・人びと・文化の交わり・循環

1日のあいだの来客傾向はどうだろうか。平日の朝は通勤途中の男性らが慌ただしく朝食を買っていき、日中は比川のお年寄りらが食品や雑貨を買いがてら店員とおしゃべりする姿がみられ、1日に何度も来店する人もいる。また時折、地域の個人や業者が惣菜や地場産品などの納入にやってきましたり、観光客が大勢やってきて土産物や飲物を買っていくこともある。夕方には帰宅前の女性らが食品を購入していく。休日には家族連れが賑やかに菓子や玩具をみにくる。来客が多いのは通勤時間帯の朝夕だが、それ以外の時間帯も誰かしら客が店内にいる時間はかなり多い。

店内には畳が敷かれちゃぶ台が置かれたゆんたく座敷があり、ゆんたく（おしゃべり）したり食事をしたりすることができる。棚には地域関連の書籍が並び、新聞や雑誌を読むこともでき、かつては移動図書館も置かれていたという。また店の入口にある大型の掲示板には公的な通知やイベント情報が掲示され、扉や店内の壁にもさまざまな情報が掲示されている。店が単に買物する場ではなく、情報を交換するコミュニティ空間として機能している。



ゆんたく座敷：宮坂撮影

客層は子どもからお年寄りまで幅広く、店では島内のおよそ誰と会ってもおかしくなさそうである。むろん自衛隊員やその家族も買物にやってくるし、店員にも自衛隊員の家族がいる。この状況は自衛隊誘致に反対することと結びつけて共同売店を開店させた関係者にとってはむろん素直に喜べない。しかしすでに自衛隊員とその家族は島のあちこちに暮らし、同じ店で買物し同じ飲食店で席をならべている。彼らを排除することはおそらく誰のためにもならない。そうであるとすれば、共同売店も与那国島の活気と奥行きある文化に触れる場として、自衛隊関係者に開いていくほかないだろう。そしてそのことを積極的に捉え、彼らに与那国島を「国防の要衝」としてでなく、「文化栄える地」として尊重する視点をもつよう促すというのがよりよい方向性ではないか。

おわりに

自衛隊やミサイルの配備が島民に有無を言わせない形で進められていくことに対しては、粘り強く反対の声をあげ続けることが必要である。外間前町長をはじめ、島の活性化のためだと誘致賛成の立場に立った人たちからも、急速に島が軍事基地化されていくことに違和感が表明されている（八重山毎日新聞 2月16日）。わがもの顔の権力に対し、機会あるごとに違和感を声に出していくことは、少しでもそれを抑制させることに結びつくはずだ。それと同時に、生活を通じての意志の表明という実践にももっと目を向けていいのではないか。私は比川地域共同売店の運営に関わる人たちからそれを学んだ。この売店は一見するとコンビニエンスストアのように見えなくもないが、実際のところフランチャイズ・システムのマニュアルに沿って営業している店ではない。地域の人びとの毎日の生活の一部として仕入れがなされ店づくりがなされる、常に生成し続ける店である。このように生きている店は、その存在自体がひとつの意志表示である。そこに作られ続ける店があるということは、そこに「文化」が生成し続けているということでもある。文化が生きていれば、それは第三者にも魅力的に映じる。軽んじられない。

生活は日々の何気ない行為の反復である。食料や日用品を購入するというのも、販売するというのも、それを機に島のさまざまな人たちと交流するというのも、何気ない行為のひとつである。それらを意識して自分たちで作り上げる行為にしてみるのだ。他者に生活を委ねれば楽であろうが、つまらないし、知らないあいだに軽んじられ言いなりにされてしまうかもしれない。与那国島が全体としてそのような道を選びつつあるなかで、そうではない、自ら意識的に創造する生活の場があるというのは希望だ。比川地域共同売店に関わる人たちをこれからも応援したい。

## 参考文献

- 宮城能彦、2016「科学研究費助成事業 研究成果報告書：国境の島与那国の権力構造と移住者主体の地域活性化による共同体の変容」  
-----、2022「共同売店の変遷と現在―その理念と精神の可能性」『月刊自治研』自治労本部、2022年5月号、pp.55-60。  
小野雅司・豊川裕之・丸井英二・Toshihiko AGATA・崎原肇造、1979「沖縄県与那国島の人口変動と人口構造の変化」『民族衛生』45巻3号、pp92-103。

## 参考新聞

八重山毎日新聞 2月16日、2月23日

## 参考ウェブサイト

与那国町 [town.yonaguni.okinawa.jp](http://town.yonaguni.okinawa.jp)

比川地域共同売店 [hikawa.ti-da.net](http://hikawa.ti-da.net)

山口陶工房 [yonagunipot.com](http://yonagunipot.com)

離島経済新聞「おもしろい共同売店のあるシマはおもしろい【特集 | つよく やさしく たのしい 地域共同体に学ぶ島のシマ】」 [ritokey.com/pickup/k38\\_16\\_17](http://ritokey.com/pickup/k38_16_17)

## 飯島滋明

名古屋学院大学教授

専攻－憲法学・平和学

email: koro8898@yahoo.co.jp

## 宮坂清

名古屋学院大学准教授

専攻－文化人類学・民俗学

email: possecstasy@gmail.com

---

2023年3月19日 第1刷発行

軍事基地化に抗する－与那国島からの報告－

飯島滋明 宮坂清

---